

部 長 新 家 秀 昭
研究主任 川 澄 千佳子
部 員 数 48名

1 研究主題

主体的に創造活動の喜びを味わえる実践と評価方法

2 はじめに

小学校は昨年度、中学校は今年度から新学習指導要領が全面実施となり、昨年度から一人一台タブレットが導入された。社会に開かれた教育課程の実現のために、指導や評価の実際について多くの教員で検討し、授業改善を目指していくことで、主体的に創造活動の喜びを味わえる児童生徒の育成に繋がると考えた。そこで今年度は、ICT活用と評価方法の向上を目指した実践を目標に、研究主題を設定した。

3 研究経過

(1) 図画工作科・美術科指導

- | | |
|---------------------|--------|
| ア 教員の苦手意識調査 | (4/20) |
| イ 苦手項目に対する改善策 | (5/11) |
| ウ ICTの活用方法の実践報告 | (6/18) |
| エ 評価方法（学年ごとの実践報告） | (12/7) |
| オ 実技講習会（絵の具・人物デッサン） | (1/11) |
| カ 次年度の指導計画検討 | (2/8) |

(2) 図工・美術競技会、教育展

- | | |
|--------------|---------|
| ア 教材研究 実技 | (5/11) |
| イ 競技会・教育展の反省 | (10/12) |

4 研究の概要

(1)ーア 指導に対する教員の苦手意識を把握する目的で、記述式アンケートを実施し、苦手項目を抽出した。今年度はICTと評価方法について検討することとした。

(1)ーイ 苦手項目に対する改善策として、経験の多い教師の助言や他校の事例などから改善策を練った。



写－1
研究会の様子

- (1)－ウ ICT活用の実践内容を各校で持ち寄り、共有した。制作過程を記録したポートフォリオや、小学校の造形遊びの相互鑑賞のための資料、アイデアスケッチを練るための資料集めなど各校で工夫を凝らした実践があった。
- (1)－エ 各学年で題材を決め、それぞれの評価の実践発表を行った。事前事後で観点別評価の項目を話し合い、より客観的な評価を行うためにはどうすればよいか検討を重ねた。同じ題材で実際の作品例を見ながら評価について考えることで、より具体的に検討を進めることができた。
- (1)－オ 実技講習として、現役教員から講師を招き、道具の使い方を学ぶと共に、各々の苦手分野の経験を積む。また、授業で活用しやすい教材の開発も行うなど、自分の授業、児童生徒や学校に合うように変え、それぞれの目的に合わせて実施した。
- (1)－カ 今年度の研究成果をもとに、ICT活用や評価方法の見直しを行い、よりよい年間計画を各学年で作成し、共通認識のもと児童生徒への指導が行えるようにした。
- (2)－ア 各校の年間計画をもとに学年ごとで話し合い、教材の決定、指導計画を練った。
- (2)－イ 図工・美術競技会・教育展の反省では、教育展終了後に、競技会の準備までに困ったこと、当日困ったこと、今年度から変更された題材についての意見などを小牧市文化部へ提出した。



写－2
実技講習会の様子(人物デッサン)

5 今後の課題

今年度は、コロナの影響で昨年度行うことができなかった評価について、具体的な実践を共有することができた。事前に観点別評価項目について、意見交換をし、共通認識をもって臨んだが、各校での評価方法のばらつきや主体的に学習に取り組む態度の評価方法、教科書の参考作品と実際の評価との差異など、さまざまな課題が見つかった。こうした課題を多くの教員でさらに検討を重ねていく必要がある。

また、実技の指導を行う中で、技能を高める指導を重要視してしまうところがあるが、児童生徒が主体的に取り組む中で技能を習得していくことができる指導を目指していきたい。



写－3
人物デッサン用教材